

## 横井小楠における攘夷論から開国論への転回

源 了 圓

### 一 「攘夷」から「有道・無道」のパラダイムへ

「攘夷論」から「開国論」への転回は異文化接触という観点からも、個人の精神史という観点から言っても極めて興味ある問題であるが、横井小楠（一八〇九―六九）の場合もその例に洩れない。彼の転回は安政二年（一八五五）の秋、『海国図志』という著作を読むことによって起ったが、その五年前の嘉永三年（一八五〇）五月十三日附の福井藩士三寺三作宛への書翰においては、次のような激烈な攘夷の思想が展開されている。「夫我 神州は 百王一代三千年来天地の間に独立し世界万国に比類無<sup>レ</sup>之事に候へば、譬人民は皆死果、土地は総て尽き果て候ても決して醜虜と和を致し候道理無<sup>レ</sup>之候」（『横井小楠遺稿篇』一三五―六頁。以下本書についてはページ数のみしるす）。このように後に幕末日本の最も開明的思想家とみなされる小楠も、第二次大戦下での竹槍決戦論を想起させる攘夷論を展開していた時期があったのだ。

小楠がこの手紙を書く前年の閏四月、英艦マリナー号が浦賀に入港し江戸湾の測量をするという事件が起った。この事件は幕府の当局者には相当ショックを与え、翌五月に三奉行を初め有司の人々に「外国船打払い令」復活の可否を問うた。その時提出された対策が百余通あり、その写しが若干小楠の帰属する肥後藩にも伝えられた。それを見て小楠は、その大抵が「軍器防禦之手当之末」を説くもので、「天下大勢之所<sup>レ</sup>係大根本を通論」したものは一通もなかったことに愕く。なおまた當時を代表する儒者として尊敬されていた佐藤一斎が「和議通商の説」を立てたという噂も小楠の耳にはいつてきた。小楠にとってこれは相当のショックだったのだろう。彼は福井藩士三寺三作宛の手紙にコメントとして次のように言う。「和議之説は一斎に限り不<sup>レ</sup>申、余程多く御座候由。就中学者之説に出候と承り、學術之不正人心之邪なるとは乍<sup>レ</sup>申、誠に以て沙汰の限なり」（同上、一三五頁）。そしてこのような状況は「南宋衰弱之時勢」に少しも替るところはないと極言する。

恐らく小楠の右の発想は、当時後期水戸学に共鳴したような感慨ある「田舎武士」<sup>〔1〕</sup>たちの共有するものであったろう。この三寺宛の手紙は「浩然正大之氣」「神州固有之正氣」等の語を用い、藤田東湖の「神州正大之氣」の詩を連想させる。当時の小楠は一方では『中庸』や『中和集説』（山崎闇斎著）を読んで心法の工夫をなすというように朱子学に立脚する儒学者としての研鑽・修養を怠りなくつとめるとともに、他方では『春秋胡伝』を読んでは自己の「大義名分」の考え方を検討し、肥後藩士としては、藩の主流「学校党」に反対して、家老長岡監物（米田是容）を長とする「実学党」という改革派に下津休也、荻昌國、元田永孚らと共に参加して「講学・討論」を深めるとともに、林櫻園を精神的指導者として仰ぐ宮部鼎蔵、永島三平、河上彦斎らの「肥後勤王党」とも交わっていた。活力に満ちていたが、その精神状況は混沌としていろいろの矛盾を精神の内部に蔵していた。そしてこれらの諸派は国内政治に対する立場を異にするにもかかわらず、安政二年当時みな攘夷論をとっていることで共同戦線を張っていた。

このような状況にあった小楠がどうして安政二年、突如として開国論に転ずることになったのか。それを知るためにまず嘉永六年（一八五三）に川路聖謨（一八〇一—一六八）のために書いた「夷虜応接大意」を検討しなければならない。川路は小楠の江戸遊学中の交友であり、小楠の『遊学雑志』の天保十年（一八三九）の条にも「八月十九日川路三左衛門殿を訪ふ。此人其名を聞くこと久し、果して非常の英物なり」と記されている。聖謨は、当時「御勘定吟味役」の重職にあったが、ここでは彼

がいかに職務に精励格勤であるか、それとともにいかにその余暇をさいて文武の道にいそしんでいるかが事細かに記されている。小楠は川路聖謨という人物によほど感銘を受けたのであろう。

嘉永六年の七月、ロシアの使節プーチャチンは軍艦四隻を率いて長崎に入港、国境劃定・交易開始に関する国書を提出した。幕府は川路聖謨、筒井政憲の両名を応接係に任じ、長崎に派遣することにした。この報を聞いた小楠は藩の許可を得て長崎を訪れ、いかに応接すべきかということについて川路と論ずるつもりであった。ところが長崎に着いてみると、幕府使節の到着の遅さにしびれをきらしたプーチャチンはすでに出港し、川路は未着だった。やむを得ず小楠は川路のために「夷虜応接大意」を書いて長崎港関係の幕府の役人に川路に送致することを頼んで帰国した。

この文章で小楠はロシアの使節だけでなく、アメリカの使節を含めて外国の開国を求めている使節にどう対応すべきか、ということの基本方針を述べている。ここに述べられた基本方針は「只此天地仁義の大道を貫くの条理」を得ることにあるとするものである。そして外夷に処する「国是」は、「有道の国は通信を許し無道の国は拒絶する」という二つの態度しかない、有道・無道を分たず、一切拒絶するのは「天地公共の実理」に暗く、遂に信義を失うに至るとするものである。ここで「有道」というのはただわが国に信義を失なわない国ということだけを言うのではなく、日本以外の国に対しても亦、信義を守り、侵犯暴悪の所行なく、天地の心に背かない国をさして言うのであって、そういう国があっ

てわが国に通信交易を望む場合に、これを拒絶する道理はまったくない、と小楠は言う。

そしてわが祖宗たちがこの道理を理解して、すでに中国、オランダの二国に交易を許されているのに、万国はこの道理に暗く、アメリカの書翰にも、日本は鎖国を国是としていっているがそれは彼らがまったくわが国の国是を知らないからである。ただ外国だけでなく、わが国の人々も亦、鎖国を日本の国体であるという風に思いこんで、彼らの信義が万国に貫くものであるかどうかということによって対応の仕方を決めるというわが国の「天地仁義を宗とする国是の大道」を知らないから、自己の信義を失い、彼の忿怒の心をひき起して、大いに国体<sup>こくたい</sup>を誤まるといふ結果に至っていると慨嘆する。

そこで今アメリカの使節に対する答には、「有道」の国には国交を許し、無道とは絶つというのがわが国の国是であって、一切鎖国するといふものではないことを明らかに示し、その後、彼らのこれまでの日本へのアプローチの仕方は、日本が彼らの通信通商の望みを許さないと、すぐ軍艦で迫りくるといふ無法なものであって、彼らが妄りに国禁を犯して浦賀に乘入れ、わが国の法度を守らないといふ無礼無道をほたらいていることを責め、このような国には国交を結ぶことを禁絶するのがわが国の大法であるということ<sup>ことば</sup>を言い聞かせるならば、彼の国の代表は叩頭して非礼を陳謝し、前非を改め、必ずや通信通交を乞うであろう。その時は、朝に無礼をはたらき、夕べに改めるといっても、それはその実なくしてその辞<sup>ことば</sup>だけがあるに過ぎないと言ってこれを拒絶し、もし貴

国がわが信義に服し罪を改めようということであれば、後にその信義が世界万国に貫徹する時を待つて改めて通信通商のことを相談しようという態度をとるならば、彼は何の言葉があつて兵事をおこすことができようか。もしこう言つても彼が自己の罪に服せず強いて兵を起すときは、「彼曲<sup>かれ</sup>にして我は直」であるから、必死を以て戦うならば百戦百勝たるは顯然としてゐる。何の懼れることがあろうか、と小楠は言う。

ではロシアに対してはどういう態度をとるか。日本側がまずアメリカを拒絶する「大義理」を述べ、もしロシア側でも日本を援けようということがあつても、力を他国に借りることはわが道ではないとこれを説諭するならば、ロシア側は必らずわが国の「有道信義」はアメリカの類ではないと述べて通信を乞うであろう。ここにおいて日本側はロシアに対して、もし日米間に事があつてももしアメリカが軍艦を以てやってくるならば、厳しくこれと血戦しその罪惡を懲すべき時である。それなのに今わが国がロシアと通ずるならば、世界万国がわが国を「不勇」と唱えることはもうはつきりしていることだ。これはわが国の深く恥じるころであるから、今は通信經濟を許すべき時ではない。開国を求めるならば、後年その時が来たら相談することがありましようと思ふならば、彼はまた、どういうことばで再陳することができようか。小楠はこのように述べて「凡天地の間は只道理のあるあり、道理を以て諭べて諭さんには夷狄禽獸といへども服せざる事不能也」と自分の信念を展開する。彼はさらに今日の日本で外国と国交の問題について接衝する時に次の四つのタイプがあるとする。

(1) わが宴安に溺れ、彼の威強に屈して和議を唱えるもの……これは最下等である。

(2) 鎖国の旧習にならずで理非を分たず、外国を一切拒絶して、どんなことがあってもこれと戦おうとするもの……これは(1)の、「宴安の徒」にはまさっているが、「天地自然の道理」を知らないで必敗を取る輩である。

(3) 外国の無礼を憎み、戦おうとは思いうけれども、わが国の二百五十年の泰平に、天下の士気が頹廢して、武士たちがみな「驕兵」となつてとてもまともに戦えない状態になっていることを心配し、暫らく身を屈して彼と和を結び、その間、時を稼いで士気を張り、強国になってその後彼と戦おうとするもの……これは恐らくペリー提督の率いる黒船を迎えた当時の為政者たちの主流の考えであろう。小楠はこの考えは一見、彼我の国情を明らかにして利害の実を得たかのように思われるが、事態は一見彼らの見るところに似ているけれども、その実は「天地の大義」に暗いだけでなく、利害においても亦彼らの見るところのようになることはあり得ない。廟堂に在る人(政治の責任を担う地位についている人)が仮にも彼と和を結ぼうという心がある時は、天下の人心はいよいよますます惰弛に赴いて、士気はいずれの日か振い立つことができようか。また、器械においても整うことはできない。再三訓令を出して戒めても、何の効果もないだけでなく、天下はついに瓦解土崩の勢をなすことは避けがたい。

(4) (1)(2)(3)のすべて駄目である。であるから今日に当っては必

戦の計を決めて、幕府、列藩共に傑出した人材を挙げ用いるということが第一の緊要のことである。その人を挙げる時はその政は革まり、天下の人心は日本に大義のあることを知って、士気一新するも一瞬間にある。そして今日の驕兵がたちまち変じて精兵となることは、ちょうど掌を返すことのようにやさしい。――

小楠はこう言つて、「戦の勝敗は砲煩器械のみにあらずして正義の天地に貫と不貫と人心の振と不<sup>ふる</sup>振とにあり。況や人心振時は器械砲煩も亦隨て実備するに於てをや。百夷千蠻何のおそれあらん、是利害得失の見易きもの也。故に我は天地の大義を奉じて彼に応接するの道今日の一義にあらずや」と言い、これしかわれわれの執るべき道はないとする。わが国が毫も彼が強梁横行を恐れないで、大義を明らかにして彼を拒絶するならば夷虜は戦うことなくしてそれに畏服せざるを得ない。以上が小楠の示した夷虜に応接する「大義」である。これはあくまで「応接の大綱領」すなわち基本方針であつて、実際の応接の場では機に臨み変に應じてこの「綱領」を拡充して使節としてどう事に当るかはまったくその人次第である。したがつて応接の人材は最も心して選ばなければならぬ。このように開国を迫ってくる夷虜の使節にどう應對するかということについての自分の基本方針を述べた後、これまで縷々述べてきたことを次ぎのように要約してこの一文を終わっている。「夫天地有生の仁心を宗とする国は我も又是をいれ、不信不義の国は天地神明と共に是を威罰するの大義を海外万国に示し、内天下の士気を振起して器械砲艦漸を以全く備るに至りては万国醜虜我正義に服従せざる事能は

ざるもの何の疑かあるべきぞや。」(一一—一四頁)。

短かい文章であるけれども、その中に含まれている内容の豊さ、深さ、論理の明晰さ、鋭さ、そうして日本中の「正気」が小楠の筆に乗り移ったかと思われるその気魄に今読んでも圧倒される。かりに小楠が幕閣にあつて、小楠がこのような態度で応接したなら、あの傲岸なペリーはこれに対してどう応対したろうか。もちろん外交は使節一人の力によつてなされるのではなく、その背後のモラル・サポートがなければできないことであつて、かりにこの時小楠が幕閣の前でこの見解を述べたとしても、それが文久年間の幕閣のように支持を与えたかどうかかわからないが、齟つてペリーは、日本にも人ありと却つて尊敬の念を惜しまなかったのではないか。しかしペリーが小楠の言う通り長崎に商船でやってきてアメリカの立場で条理を説き開国を要求した時、果して事態はどのように展開したであろうか。また逆にペリーが攻撃を強行し、米兵が上陸してきた場合、日本の国内はどうなったのだろうか。いろいろ困難な事態が想像されるが、政治の責任を担っている人がまず事態を直視して、日本の進むべき道を宣言し、国の内外におけるあり方を改革し、国民の協力を要請するならば、事態の解決は小楠の言うほど簡単ではなかったことは明らかだが、しかしまた当時の幕閣の考えるように絶対不可能なものではなかったと思う。幕末日本の進んだのとは異なる動きが始まったであろう。

ここでわれわれは彼の言う「大義」ということばについて考えよう。文字通り言えばそれは大なる道徳的原理であり、くだいて言えば人々の践

み行ふべき最も重要な、基本的道であり、儒教では君臣間とか父子間の道義をさすことが多かった。日本の武士社会ではとくに「大義親を滅す」ということが好まれ、君臣間の道徳が最優先された。しかし小楠のいう「大義」はそういう意味ではない。この一文において彼は「天地の大義」(二箇所)「天下の人心大義の有事を知り」「大義」「応接するの大義」「天地神明と共に是を威罰するの大義」という用例を示し、そのほか注目すべき用語としては「アメリカを拒絶するの大義理」「万国醜虜我正義に服従せざる事能はず」という文脈で使われているところの「大義理」「正義」という「大義」に近いことばがあり、また「信義の万国に貫くと貫ざるとの天地仁義を宗とする国是の大道」という「信義」「国是の大道」ということばも亦閑却することができないと思う。

いずれにしてもそれは一藩ないし一国内の「君臣の大義」の次元を越えたことばであり、日本が新たに国際社会に直面した時、一国内の支配者とその臣下との関係の倫理では処理できない国家と国家との間の、両者を共に平等に規制する道徳的原理・儒教に基づく国際正義の理念に生きたるアジア側からの首唱としての「大義」なのである。それは「大義理」(偉大な道徳的原理)であり、国家を越えた「天地の大義」であり、またそれ故に国際間の「正義」であらねばならず、それを守ることは双方にとって相手国への「信義」であり、一国について言えば「天地仁義を宗とする国是の大道」——すなわち一国の政治の基本方針、国家そのものの基本的理念としての「大道」でもあった。

この時点の小楠はもちろん西洋の国際的自然法というものを知らな

い。彼は自前の儒教理念で考えてゆかねばならない。小楠は日本の国家としての理想形態を「君子国」として捉え、その具体的あり方を「天地の心を軀し仁義を重んずる」ということにあるとした。そして彼の主張する「大義」を基礎づける原理を「天地仁義の大道を貫くの条理」「天地公共の実理」とも称した。それは「天地の間は只だ是道理のあるあり」とする「道理」であった。これ以上問題は突き詰められてはいないが、「条理」「実理」「道理」ということばに示されている「理」の観念が「天地仁義の大道」「天地公共の実理」すなわち「天地」が天地の「道德性(仁義)」「公共」という普遍性と結びついて、一国範圍の道理を超える普遍的理性として捉えられていることが注目される。これらのことばが、『万国公法』に接触する前に使われていることは、儒教のもつ思想的可能性を示すものといえよう。<sup>(2)</sup>

## 二 ケンペルの「鎖国論」との出会い

「開国・攘夷」というパラダイムでなく、「有道・無道」という新しいパラダイムで欧米列強との国交問題に対処するところまで到達したのに、小楠はなぜ安政二年まで攘夷論者だったのか。その原因の第一はいうまでもなく、彼はこれらの国々を有道の国とは認めていなかったからである。英・魯・仏・独は日本以外の他の国々に対して無道をはたらいた実績があり、当時の米国はその点問題はなかったが、ペリーの恫喝外交は武士としての小楠の誇りを傷つけ、米国は「無道の国」であるという反撥心が彼の中に強かった。第二に、徳川斉昭・藤田東湖に代表され

る水戸藩に対する小楠の期待が大きく、それを核として外国勢力に抵抗し、内は内政を改革しようとする日本の国政改革の目論見が彼の中にあったことも理由の一つとしてあったように思われる。しかしそれだけでなく、日本は資源に恵まれた国で外国と交際を結ばなくても国民の生活に事欠かない(不足と考えられた葉は中国、朝鮮から、書籍は中国から求めればよい。そして世界の動向についてはオランダから求められる)と考えていた節がある。そして日本の国が海洋に圍繞され、しかも海岸まで山が迫り、外国から攻撃されない安全な国だという認識を彼がもっていたことも、西洋諸国と交易関係を開こうとしない第三の理由であった。そしてそのような日本像を小楠の中で確固たるものとしたのは、志筑忠雄の翻譯したケンペル (Engelbert Kaempfer 1651-1716) の『鎖国論』であった。

このわが国で『鎖国論』という名前では知られているケンペルの著作は、小堀桂一郎氏によれば<sup>(3)</sup>、もと彼の著『廻国奇観』(呉秀三の訳語)(幸田成友訳では『海外快話』となっている)と訳されている長文のラテン語の書名の著作の附録として書かれた一章(第二部第十四章)であるが、後にケンペルの主要著作『日本誌』——最初は一七二七年に『The History of Japan, vol. I. II. 一七二九年にオランダ訳、フランス訳、一七三三年にオランダ訳の改訂版、一七四七—九九年ドイツ語訳、そして一七七三年には Karl Christian Dohn による現在最も完成されたものとされているドイツ版が出版——が成るや、その巻末に附録として載せられた六つの論文の第二論文(ドイツ語の「ドーム本」、英文のシヨイツェル

本では第六論文(オランダ訳は英文からの重訳である)を、志筑忠雄(一七六〇—一八〇六)が「鎖国論」という題で翻訳したものである。この原文を忠実に訳すると「今の日本人全国を鎖して国中国外に限らず敢て異域の人と通商せざらしむる事、実に所益なるに与れりや否やの論<sup>(5)</sup>」となる。

この本の訳者志筑忠雄は本姓中野、号を柳圃と称するもと和蘭通詞であつたが、「口舌の不得手」のためと、翻訳・著作に専念したためという消極・積極の理由から役をやめて隠棲し『曆象新書』(英人「*Natural History*」——ニュートン系の天文学者の著作)の翻訳、「氣」の概念によって「真空概念」を説明した「求力論<sup>(7)</sup>」の著者として知られる篤学の士であつたが、その死の五年前の享和元年(一八〇一)にケンペルの『鎖国論』の翻訳を成し遂げる。この本によって「鎖国」は初めてわが国の歴史用語となった。

翻訳後直ちに公刊されたのではなく、四十九年たつた嘉永三年(一八五〇)、国学者黒沢翁<sup>おさなまろ</sup>満によつてはじめて『異人恐怖伝』と題して刊行された。だがこの本は発行後間もなく発売禁止となり、その後明治二十四年まで公刊されることはなかった。しかしそれ以前に多くの写本が次から次へとつくられて、かなりの範囲に拡が<sup>(8)</sup>つたらしい。この本が有名になったのは原著の良さ、信頼できる翻訳の魅力、そして何よりも当時の人々にとって鎖国すべきか開国すべきかという大きな関心事が取り扱われていたことがこの本自体の潜在的力であろうが、この本の存在を世に知らしめたものは、志筑のなくなる一年前の文化二年(一八〇五)に

長崎を訪れ、この本を読み、そして恐らく志筑に会い、「読鎖国論」という漢文の序文を書いた太田南畝の筆の力によるところが大きかったと思われる。

小堀桂一郎氏によれば、言及の一番早いのは安永七年(一七七八)の三浦梅園(『帰山録草稿』)、寛政十年(一七九八)の本多利明(『西城物語』中篇)、文政七年(一八二四)の平田篤胤(『古道大意』)、天保九年(一八三八)の渡辺崋山の『駄舌小記』等があり、閲読していることが確認されている主な者に松平定信、瀧沢馬琴、伴信友、本多利明、横井小楠、勝海舟等がいる。

小楠が『鎖国論』を初めて読んだのは、天保十年(一八三九)の秋、江戸において八月十九日川路聖謨に会つて以後のことである。小楠の『遊学雑誌』は川路についての記事の後、旗本の概況についての記録、林大学頭、佐藤一斎についての簡単な記述、徳川斉昭、羽倉外記と江川太郎左衛門とが会つた時の噂話、等に引きつづいて、小楠が<sup>(9)</sup>『鎖国論』を読んだ直後の読書メモとも思われる記事が、比較的長くしるされている。『志筑忠雄が翻訳せし<sup>忠雄字和</sup>鎖国論を読むに西洋人エンゲルト ケンフルと云ふ人の著』という書き出しで、その内容の第一は世界の都城の大きさの問題で、江戸より大なる都城があることの驚きとしかもそれらはカイロ、メキシコ、モスコウの三者で、西欧の中心地ではないこと、歴史的に高名なローマ、パリ、ロンドン等ヨーロッパの重要都市はいずれも江戸より小さく、泰西人が江戸を「天下最大城」と言うのも適當であるということが述べられている。初めて江戸に出てきてその大きさに驚い

ている小楠の心情の反映ともいふべきものであろうが、小楠が歴史や文明の中心・周辺という考えをもっていたことが極めて興味深い。

第二は、「吉利支丹」の問題についての記事である。彼はこの『鎖国論』を読むことによって初めて、吉利支丹禁制の深き所以を知ったとして、事細かに豊臣秀吉がポルトガルの宗教政策が日本占領を意図してのものであったということを看破してキリシタン禁制の政策を取り始め、その方針が徳川家康、秀忠、家光と徳川幕府においても受け継がれ、家光の時に全面的禁制になった過程を刻明にしている。それらはケンペルの記事を忠実に追って書いたものであるが、そこから小楠が得たものは次の通りである。

ポルトガル人が近世初頭の日本にとって大害ある国であったことをこの本を見て知るべきである。従ってキリシタンを厳禁したことは甚だ深慮があった。具体的にそれが大害があった点を列举すると

(1) 吉利支丹はわが国の愚民を誑し、信心を弘通させて禍乱の基になる。

(2) わが国の貨財を外国に運び出し、国を空亡の状態にする。

従って国家のこの上もない大害となる。

小楠は日本のこの状況を清初状況と比較し、康熙帝の時吉利支丹を許した結果として、中国の吉利支丹は①儒の教を混ぜ、孔子を褒り祖考を祀ることを許すもの、②儒法を雑えず行ふもの、の二派に分れたが、①は本国から禁止され、②はその教法を禁じ国内を追逐された。唐土は文明の国だから吉利支丹にまどう者は少く、それが国家の害たる

ことは少かった、と記している。

原城に籠って幕軍に抗戦した吉利支丹軍の統率者益田(天草)四郎時貞は肥後小西幸長の配下の士であつたが、幕末の小楠は意外なほど吉利支丹のことについて知らない。そのことは幕府のキリシタン抑圧策が効を奏して熊本でもキリシタンのことは風化したことを示すものだろうか。ところで(2)に示されるように、キリシタンは経済問題と深く関わっているが、小楠の場合、開鎖の問題を考える時、吉利支丹についての恐怖は彼の鎖国説の原因としてはまったく考えられていない。この問題についてはこの後ある程度の時間の経過を置いて小楠が攘夷論時代に書いたと思われる「読鎖国論<sup>(10)</sup>」という未完の論策を検討しなければならぬ。まず全文の書下しを左に記す。

我が邦は東海中に孤峙し、天地の中を得、物足り人蕃<sup>しげ</sup>し。外には山海風濤の險有り、内には列国藩屏の固き有り。万国に雄視すること二千年なり。昔日蒙古、十万の軍を挙げて来り侵さんとするも、一風濤之を淹滅す。爾後醜虜の敢て覬覦の心を萌さざるは、抑も天の我が邦に於ける、独り之を厚うする者の有りて存するに非ずや。豊太閤雄大の見を以て一切万国の通を絶つ。当今の制は之に因る。独り進港を許すは清・蘭の二国のみ。此の二国は我れ好を修し交を結びしに非ず。書籍と薬物と彼に需むる所あればなり。又其の交通に因りて以て万国の動静を窺察するに非ず。但だ二国の通久しくして且謹なる故に許して絶たざる我が覆天の仁を示す所以なり。近



き世に至りて和蘭学漸しだいに行なわれ泰西諸州沿革の勢を見る有り。遽かに其の戦艦・火器の大にして且つ巧たくみなるに愕やき、動もすれば魯西細亜・暗厄刺亜等吞并の事を以て我が邦人を虚喝いすくせんとす。是れ其の人の眼に淵識無く、胆虚声に落つるにして、安んぞ天下の勢を知らんや。天下の勢は唯我が眼有る者のみの能く之れを知るにあらず、彼の泰西の人も既已すでに之れを知る。乃ち検夫爾の鎖国論の如きは、我が山海の險絶を窺ひ、我が士氣の剛鋭を見、我が土地の産する所の百物おのずか自ら足るを知りて、極めて我が鎖国の卓越の見に服せるなり。蓋し泰西諸州襟帶相接するは、猶ほ我が七道のごとし。交はりて互に生を為さざることを得ず。是れ彼の我と球を同じうして地を殊にする所以なり。故に彼に在りては通を開くを道となし、我に在りては鎖を閉づるを道と為す。各其の宜しき所を得て、而る後之を天に順ふと謂ふ。夫れ民の頼りて以て生を為す所の者は天なり。天の賦する所、既に地を殊にすれば、則ち治法、亦殊ならざるを得ず。是れ検夫爾の論する所にして、各斯の民を安んずる所以の道に非ずや。唯に検夫爾のみならず、泰西人の論する所、往々此に出づ。予志伊勃留杜の言を聞くに、云く和蘭千百年間、魯西細人其の国王の命を奉じて輕軀を東洋に廻旋し、我が海上の險易を窺測するに、海浅く岸高く風涛暴起すれば天險を称嘆して去ると。志伊勃留杜は我が邦に在ること五年、我が邦内外の情実を悉くす。舌官某に與ふる書は見る所特に検夫爾と合す。則ち醜虜の志を我に絶ちしは、彼に在りては既に一定の見を為すなり。

然りと雖も呉子云はずや、徳に在りて險に在らずと。我れ其の險を頼みて徳を脩めずんば、則ち滔天の禍と覆地の変と、何れの世か之れ無からん。益ますます其の徳を脩め、益其の徳を固くし、醜虜既に絶つの念に安んぜず、而して天險の頼む可きを頼まず。豈是れ天下万世の安きを保つ所以の道に非ずや。

方今五大州内列国分裂し、強弱吞并して帝と為り王と為る。朝に治まり夕に乱れて定めなし。猶ほ我が永祿、天正の際のごとし。而して我が邦独り泰平の治を願ひ、日益ひましに(以下欠文、原漢文、六九二—三頁)

一読して『遊学雑誌』におけるメモ的記事に対して、この「読鎖国論」は小楠が『鎖国論』を繰返し読み、心の中で反芻して原著者の言わんとするところをよく受取り、それを自家薬籠中のものとして、自分の「鎖国」という問題についての考えを結晶させたものと言うことができる。

小楠が『鎖国論』を引いて鎖国肯定の最大の理由としていっているところは、(1)わが国の「山海の險絶」、(2)「士氣の剛鋭」、(3)産物が豊富、自足する国でわざわざ開国して交易するに及ばない、ということであつて、これは原鎖国論のエッセンスとも言ふべき部分である。アジア大陸東辺の島国であり、海浅く、海岸まで山が迫まっているこの国は攻撃侵略するのに非常に難しい国々であり、また産物が豊富でことさら外国と交易しなくても国民が十分に生活できるというケンペルの主張は、

小楠になるほどと膝を叩かせたに違いない。また士氣の剛銳についての記述はのちに小楠が『国是三論』を書く時にその後のわが国の「士風」の変化を反省させ、「士道論」を加わえた根拠となつたのかもしれない。さらに、ここに見られる三点の指摘は形を変えて『国是三論』富国論・強兵論・士道論という三部構成の骨組をつくつたとさえ言えるのではなからうか。

それから小楠がその次に「泰西諸州襟帯相接するは、猶ほ我が七道のごとし。交はりて互に生を為さざることを得ず。是れ彼の我と球を同じうして地を殊にする所以なり。故に彼に在りては通を開くを道となし、我に在りては鎖を閉づるを道と為す」という箇所、すなわち西欧の交易思想の相対化と間接的ながら我が国の鎖国の肯定は、もとの『鎖国論』の冒頭でケンペルがヨーロッパの啓蒙思想の立場に立つて世界における人間社会に障壁を築いて相互の交流を絶つことは、邪悪で大きな罪悪だという見解を披瀝しながら、「自然に恵まれ、あらゆる種類の必要物資を豊富に授かつており、かつその国民の多年の勤勉な努力によつて国造りが完成している国家としては、自分からは何も求めるものがない外国に対しては、外国人どもの計略に乗らず、貪欲を撥ね返し、騙されないようにし、戦いをしないようにして、その国民と国境を守ることが上策であり、また為政者の義務である<sup>(1)</sup>」として日本がその条件に恵まれた国であることを論述したケンペルの論述の仕方を、巧妙に小楠流に換骨奪胎したものである。

ところでケンペルの考え方と小楠のそれとの間にはその骨組において

一致するところがある。ケンペルは敬虔なキリスト教徒であるとともに啓蒙的普遍精神に浸透された人であった。彼は一方では「われわれ人間は、みな一つの太陽を仰ぎ、すべて一つの地球に住み、同じ空気を呼吸している。自然に境界はなく、われわれを互いに分け隔てるようなことは天理に悖る」という普遍思想もいだきながらも、「地球上に居住する民族が、言語により、習俗により、才能によつてそれぞれ別れて生活していることは、神の叡智に適う生き方である」とし、この「永遠の自然環境」を無視して、「自分の勢威を他の国に確立しようと努め」る君主たちを非難している<sup>(12)</sup>。このような国際状況の下では、日本のような自然条件に恵まれている国は鎖国によつて自衛するのが上策である、というのが彼の考え方である。

小楠は儒者であるから、「天」や「理」や「道」という普遍的理念の下に、地球のあらゆる国々は平等であり、対等の立場で交渉するのが道に適うという考えをいだき、しかもあらゆる国は「割拠見」（自己中心、自国中心的考え）に捉われがちであるから、「天下万世の安きを得る所以の「道」（『読鎖国論』六九三頁）である「仁」の思想の実現を追求しながらも、そのような国々の国家的エゴイズムに対しては国を閉じて自衛すべきである、というのが小楠の考えである。そしてここでの小楠は、戦いにおいて恃むべきは「徳に在りて險にあらず」という呉子のことを引きいて、「天險」を最終の頼みとしないで、「徳を脩め」「徳を固く」すべきことを説いて、「夷虜応接大意」に見られる有道・無道の原理に立脚する応接につながっていく。

### 三 『海国図志』とその幕末日本における受容

前にしるしたように小楠が開国論に転じたのは安政二年の秋のことであつた。小楠自身がそのことについて遺した記録はない。われわれに遺された記録は、小楠の弟子内藤泰吉の『北窓閑話』<sup>(13)</sup>七頁の次の記事だけである。「安政二年、二十八歳のとき先生(横井小楠のこと)は海国図説(志)により、愈々開国論を主張さるゝことになつた。俺を相手に毎日談が始まる。昼飯を忘れたことが百日も続いた。先生は兵法で談される。俺は医術を以て之れに応じ、大に啓発する処があつた。此の対談以来、先生の学意が大いに判つて来た。」

泰吉は肥後南開の医者内藤桂壽の三男で、当時沼山津に新築されたばかりの小楠宅に住みこみ、小楠に仕えながら医業を開き、沼山津の小楠家から洋学系の医師寺倉秋堤(熊本在住)のところに通つて医学の勉強をし、帰宅してから師小楠の説を直接伺うという生活を送つていた。当時数え二十八歳、この年八月、転宅後間もない小楠の自宅に泊りこみながら右のような生活を始めたのである。

では小楠が開国論へと眼を開かせる機縁となつた『海国図志』とはどういふ本で、どういう風に日本に伝えられたのか、また小楠はこの本からどのように啓発されたのか。

この本は清末の道光二十二年(一八四三)、魏源(一七九四—一八五七)の手によつて編まれた世界地理の本であるとともに、世界各国の歴史、政治、経済、宗教、教育等々についても記した「世界事情」ともいふべ

き性格をもつた本であり、さらにこの本の冒頭には魏源自身の書いた「籌海篇」がおかれ、議守、議戦、議款という防禦・戦闘・外交という西洋のインパクトに如何に対応すべきか、ということについての魏源の考え方がしるされた軍事・外交の書でもある。そしてその方面については、この本の末尾に造船・鑄砲・測量・砲台の築き方、火薬の製法、その他西洋の機械をめぐる諸技術について図をつけて記されている。西洋のインパクトについてどのように対応するかということについて、実に広い文脈でいろいろの角度から情報を提供した当時のアジア社会で最も望まれた本であつた。

最初に刊行された道光二十二年の版は、五十巻であるが、魏源は道光二十七年(一八四七)にこれを改訂増補して六十巻本として出し、さらに魏源は増補改訂の作業をつづけて、咸豐二十二年(一八五二)には百巻本を出しこれを定本とした。わが国に受容されたのは六十巻本と百巻本であるが、その中心をなすのは六十巻本である。なお今日比較的容易に入手できるのはこの六十巻本であり、これは民国五十六年に台湾の成文出版社から翻刻されたものである。

なぜこのような本が編集して出版されたのか。それはアヘン戦争における中国の敗北を貴重な経験として、これから立上るためにこのような本の編集が企画されたのであつた。基礎になるプランを立てたのは、この戦争の中国側の指揮者林則徐(一七八五—一八五〇)であり、彼はすでに『四洲志』——ヒュー・マレイ(Hugh Murray)の名著『地理全書』("An Encyclopedia of Comprising a Complete Description of the Earth, Physi-

cal, and Political", London, 1834) を、袁德輝等に命じて二十分の一に要約して翻譯したものである——、「澳文月報」、「粵東奏稿」ならびに洋式の船舶の模型図、等々『海国図志』の骨格をなすものを集めていた。道光二十一年、この業の途中で阿片戦争の敗北の責任を取って新疆省に左遷されることになった林則徐は、後事を魏源に托した。

魏源自身もアヘン戦争に従軍し、两江総督代理の裕謙の幕友として戦い、敗北を身を以て体験した。戦争中は林則徐の間接の部下であった。そして道光九年（一八二九）から中国人の士気を奮い立たせるために、清朝の創業から道光年間に至るまでの中国の歴史『聖武記』を描き、とくに財政、軍事共に盛んであったありし日の祖国の姿をしるすことによって国運の回復をめざす者の輩出を秘かに願った。林則徐の依頼を受けたのは、この本の完成の前年であったが、依頼を受けるや直ちに構成を考え、オーガナイザーとしての役割を果たすということを決心し、かなりの新しい資料も加わえて、同じ道光二十二年、年初に『聖武記』年末に『海国図志』も刊行された。この大部の書の完成にいたる驚くべき進行の速さを見ると、その作業をいくつかのチームをつくって同時並行的に進めたこともあり得ると思う。かりにこのような過程をたどったからと言って魏源は人任せではなく、この本の基本方針ともいべき「籌海篇」はまったく彼の手になるものであり、その他の部分にも「源曰く」「源案するに」というようなタイトルで、魏源の考えや本文の批評が述べられ、この本を生彩あるものとしている。魏源は編集者としての責任を立派に果たしたといえよう。

この本の軍事的な基本戦略は、「夷の長技を師として夷を制する」ということであるが、ここでいう「長技」とは「戦艦」「火器」および「養兵・練兵」の三者であるが、具体的内容については『聖武記』と『海国図志』とは考え方の上で大きな違いがある。前者では西洋から砲や船を購入するということがあったが、後者では広東に造兵廠や火器局を置いてアメリカ、フランスの二国から指導者や技術員たちを呼んで、船や火器の製造を始めること等の提案をなすほどの飛躍を示している（「籌海篇」の「議戦」の項）。

『聖武記』『海国図志』を問わず、魏源の軍事的戦略の卓越性は、狭義の軍事的技術面への関心に止まらず、より広い戦略的観点から問題を捉えているところにある。具体的には「訳館を立てて夷書を翻譯」すべきことの提案である。ここに見られるように西欧の科学技術文明の採用や、外国の事情を知るための措置が講ぜられている。

次に「外交戦略」の問題に移ろう。この面は『海国図志』において初めて展開した。それは二つの側面をもっている。第一は「夷を以て異を制する」というものであり、第二は「夷を以て夷を款する」ことである。前者は中国の伝統的な遠交近攻的な外交政策であり、後者は「互市・議款の通商政策である。彼は南京条約の成立（一八四二）以降は、積極的に国を開き、通商貿易をする道に転じた。さらに彼は、外国の経済発展の背後にある民主政体への関心をもち始めたように思われる（とくにアメリカ篇、それほどではないが、イギリス篇にも）。すなわち『海国図志』はその読み方によって、読者たちに「洋務家」になることも

「変法家」になることも、極端な場合は攘夷家のまま外国勢力を撃破するための「火器」をつくることを教える本として読まれることも可能であった(李朝末期の朝鮮では、『海国図志』の火器製造の諸篇を読んで、実際に戦艦(戦闘する船という程度の意で戦艦・巡洋艦と併称される時の戦艦ではない)水雷砲がつくられた<sup>(15)</sup>)。

この本は、一つ一つの事柄の認識の精密においてはまだ欠けていることは否定できないが、その包括的・総合的見方においてすぐれている。そして「中華中心主義」を捨てて、世界の中で自国を見ろという視点を取った点においては、中国の歴史でも画期的な著作であった。

では『海国図志』はどのような経緯で日本にはいり、どのように幕末の日本社会に受容されたのか。日本に伝わったのは嘉永四年(一八五二)で、もともと中国では同年に出版された『聖武記』より七年遅れる。その理由は、禁制のキリスト教に関する記事が載っているので、日本にもって行っても所詮駄目だろうということだったようだ。嘉永四、五年と引き続き輸入されたが、案の定「御禁制の文句」があるということ、奉行所や長崎会所に保管されて公開されていないし、幕府がこれを利用した形跡もない。正式に輸入されたのは嘉永七年(一八五四)九月のことである。この時十五部輸入され、うち七部が幕府御用となり、残り八部が競売に付せられた。幕府の許可は同年三月のペリー提督の率いた黒船のインパクトによる。もちろん『海国図志』の一部にキリスト教関係の記事はあったが、国家の危機として世界の情勢を知ることが何よりも優先されたのである。そしてこの時輸入された原著並びにその翻刻

が、幕末の日本を揺り動かすことになる。

このときの幕府側の対応で注目すべきは、当時勘定奉行の地位にあった川路聖謨の行動であった。彼は幕府の文庫に秘蔵されていた『海国図志』の一部を読んで、わが国に与える利益を思い、老中阿部正弘にその旨を告げる。阿部は「有用の書」を文庫にとどめるのは道理に反するとして、閣老、参政たちに下附して熟読させる必要を感じ、將軍の許可を得る。まず政權の中枢部にあった人々の『海国図志』の勉強が始まる。

聖謨はこの迅速な対応を喜び、この範囲だけでなく、これを翻刻して「公衆有志者」に見せるのが国家のためになると阿部に申し出て、余った一本の下附を請い、即時、下附と翻刻を許された。聖謨は儒者<sup>しおのやとう</sup>鹽谷宕陰、蘭学者箕作阮甫に校訂の作業を頼み、私費を投じて浅草の須原屋仲八に翻刻、出版を依頼した(『川路聖謨の生涯』)。幕府の開明官僚川路の尽力によって『海国図志』は死蔵を免れ、しかも原典以上の正確なテキストとなつて、多くの日本人に読まれることとなった。

このような過程で、政治家、識者だけでなく、国民一般に公開されることになった『海国図志』の、わが国における受容の形式面から見た特色の第一は、直ちに二十三種類もの翻刻が出たことである。これを発行にしたがってみると、嘉永七年(安政元年)十五、安政二年五、安政三年二、明治元年一となつて、当初の三年間に集中的に出版されている(『鎖国時代日本人の海外知識』)。

特色の第二は、多くの種類の「書下し文」が出たことにある。翻刻の形式は、①鹽谷・箕作の協力による原文の事実の誤りを正し、誤植を

球日本史』3、一九九九年、扶桑社、を参照されたい。

#### 四 横井小楠における『海国図志』の受容と開国論への転向

——軍事的観点の開国論と経済的観点の開国論——

直し、その上で訓点を施し、地名、人名に洋音のルビを施した「校訂本」四、②単なる「訓点本」三、「書下し文」十六の三種類がある。漢学者、洋学者の協力による正確な校訂本の出版は中国や李氏朝鮮にはなかった特色だが、書下し文が十六種類も出たというのもそれに劣らぬ特色である。これはわが国の、漢文を自由に読まない民衆が世界の大勢に関心をもち、しかもこの本を理解する力を持っていた重要な証拠であろう。

第三の特色は、すべての巻を鰺刻するのではなく、重要と思われる巻を重点的に鰺刻していることである。その内訳は「籌海篇」二、「アメリカ篇」九、「ロシア篇」二、「イギリス篇」三、「プロシヤ篇」一、「フランス篇」一、「インド篇」各一、「夷情備考篇」二、「砲台・火薬・攻船水雷図説」に関するものの抄訳が一、「国地総論篇」一である。総計二十四となつて、鰺刻本の総数二十三と数は合わないが、それは頼三樹三郎が「インド篇」と「夷情備考篇」とを合せ、一つの巻として鰺刻したからである。鰺刻が特定の巻に限られたことは、当時の人々がこの本を緊急の役に立つ情報を提供するものとして、極めてプラグマティックに読んでいたことを示す。識者への影響という観点から捉えたと「籌海篇」の影響が最大であるが、一般国民にとっては黒船の国・米国への関心が最も大きかったことが判る<sup>(補注)</sup>。

(補注) この節で述べたことについて、より詳しくは拙稿「幕末日本における中国を通しての『西洋学習』——『海国図志』の受容を中心として」『日中文化交流史業書』3「源了圓・嚴紹璽編『思想』篇、所収、大修館書店、一九九五、ならびに『海国図志』の日中韓の読み方の違い」西尾幹二篇『地

幕末日本での『海国図志』の受容の思想的特色はその位にして、小楠自身の問題に帰ろう。小楠が『海国図志』を読むことによって攘夷論から開国論に転じたことは、前述の内藤泰吉の『北窓閑話』の示す通りであり、またその転回が小楠自身や幕末日本にとっての意味は非常に大きい。だが彼自身のことは『海国図志』について言明されているのは、遺稿篇を通して次の一箇所である。「近代鰺刻之海国図志、アメリカ之部は其国志に因て著し候間余程明白に有之候へ共、魯西亜は殊の外大略にて事情を得申事かと被<sup>レ</sup>存候事」(二四三頁、安政三年十二月二十一日書簡)。

こういう次第であるから小楠が六十巻本、百巻本のどちらのテキストを読んだのか、中国から輸入された元版で読んだのか、あるいは日本で鰺刻本を読んだのか、それを知る確かな手がかりはない。ただ言えることは彼の書いた記事の内容を通して、確かに読んだと推察されるのは「籌海篇」「アメリカ篇」「イギリス篇」「ロシア篇」の四篇だけである。そして「鰺刻」という文字が使われている以上、日本で鰺刻されたと考える方が穏当なこと、彼の経済事情や、肥後藩当局との関係を考えるならば、彼が自分の経済力で中国版の全巻を買うことはちよつと考えにく

いし、また佐久間象山や橋本左内の場合のように藩侯や藩当局から貸して貰えるということも非常に難しい。従って和刻本で、自分が重要と思われる篇だけを読んだ可能性はかなり高いのではないかと想像される。しかしもちろん確かなことではない。

小楠が『海国図志』を読んで開国論に転じた理由の具体的内容については小楠は何も語らず、内藤泰吉は「兵法で談される」（前述）と語っているだけで、その兵法の具体的内容については何も語っていないが、その主な内容は恐らく『国是三論』の「強兵論」において述べられているごときものであろう。具体的叙述にはいる前に一言しておかねばならないのは、小楠が『海国図志』の冒頭の「籌海篇」の軍事戦略・外交戦略とどのような関係をとったかということである。前者については、佐久間象山その他の多くの洋務論者と同じく基本的な考えは認めたが、象山の場合のように全面的共感というものではない。世界平和の実現ということを窮極の政治課題とする小楠の場合、西洋勢力の打倒ということを経極の課題とする魏源の思想とは全面的に一致するわけにはゆかない。しかし世界平和の実現を希求する小楠においても「日本の独立の保持」は国民的課題であるから、その限りに於いて採るべきは採るということであろう。

外交政策に関しては、洋務論者だけでなく、橋本左内のような変法論者たちも権力のバランスをとる政策をとり、英露の二大強国の日本海での対立という状況の中で日露同盟論をとる傾向が強かったが、小楠は日露同盟論はもちろん、その反対の「日英同盟論」もとらず、当時平和政

策をとっていた唯一の国である米国と協力して世界平和の実現をはかろうという独自の道を選んだ。この点では小楠は魏源の「籌海篇」からは本質的にはあまり学んでいない。彼が積極的に学んだのは、各国篇の具体的記述である。そこに書かれていることをヒントとして彼は自己の独自の思想を形成したり、それを読む以前にみずからもその方向で考えないし感じていたことをより確かなものとしていったと言つてよい。

小楠が攘夷論から開国論に転向する時に、越えねばならない三つのハードルがあった。第一は、『鎖国論』が示すように、日本は周囲海にとりかこまれ、しかも山が海岸近くまで迫っているとか、疾風が近海を襲い、また潮流も激しく変化して、日本列島に寄りつくことが非常に困難である、という鎖国論に有利な「天険」の問題はどのように解決されるのか。第二の問題は、日本は産物が豊かで、人々は生活に困まらない、何も国内の秩序を乱してまでも、わざわざ外国と通商貿易をするには及ばない、という日本国のかかえる社会的条件の問題である。

この二つはケンペルの『鎖国論』から小楠が得た鎖国肯定論の正当化の根拠であった。このほか小楠を鎖国論にとどめておくのにあずかって力があつたのは、開国を迫る世界の列強たちは果して有道の国かという疑問である。日本に対してだけでなく、世界の諸国に対して道ある態度を取ってきたか、という条件で見ると、アメリカ以外の国々は「無道の国」と言わざるを得ない。その例外であるアメリカも、日本に対して取った黒船を以てする「恫喝」外交を見ると決して「有道の国」とは言えない。ならば鎖国を守るのが日本の取るべき道ではないか。

第一は、軍事的観点からの鎖国論、第二は、経済的観点からの鎖国論であり、第三は、列国の国家としての実態の認識から生じた政治道德的観点の鎖国論である。小楠が安政二年『海国図志』を読むまでの鎖国論はこの三つの考え方の混合ともいべきものであった。小楠はどのようにしてこれらのハードルを乗り越えていったのか。私見では、小楠にとって軍事的観点からのハードルを越えることが第一の課題であり、経済的観点からのハードルはそれに次ぐ。その中の或る部分は第三の対外的認識の修正のハードルを越えた後でも、まだ問題として残り、元治元年（一八六四）の「沼山対話」においてやっと克服されたように思われる。ここでは（１）（２）（３）の順序に検討することにする。

（１） 軍事的観点からの転回……さきに示したように、内藤泰吉との対話で「兵学」の立場で開鎖の問題を論じたというのがこれに当る。わが国の天険、産物の豊饒というような自然的条件、地理学的条件はケンペルの言った通りである。しかし世界が変わったのだ。航海術が発展し、火輪船が発明されて以来は、千万里離れた国も亦比隣のようなのである。地球上氷海を除くの外は「至らぬ限」もない。天険も恃みがたい時勢になったのに、日本だけ独立して鎖国していいようにしてもそれは不可能だ。何時までも旧見を固執して短兵陸戦を日本の「長技」と頼み、あるいは俄かに銃陣を学んで侮りを受けないように禦こうとするのは、憐れむべき「陋習」だ。その理由は、今となつては日本は「孤島」——「列島」ではなく「孤島」という文字が使われていることに注意——になつてしまった。ところで小楠は国を大船に、四海を陸地に譬える。わが陸

兵を以て彼の海軍の攻撃に対応しようとするのは、船に乗って陸上に戦うようなもので、彼は「主」、我は「客」である。我が軍が進んで攻撃するのは非常に困難だ。また退いて守ろうとしてもその処がない。彼は利を見て進み、不利を知って退く、進退自在であつて、わが軍は敵の思うように蹂躪されることはあつても、敵を思うように蹂躪することは困難だ。且つ彼が数艘の軍艦で東に姿を見せ西に出没すると、日本の沿海は悉く守らざることを得ず、徒らに奔命に疲れて戦う以前に斃れてしまふ。又敵艦が近海に横行して海運を妨げ積荷を奪うならば、全国の港をつなぐ通路は絶えて人民の困難は言いようもない。江戸のごときは数日を出でずして飢餓におちいるだろう。このような日常卑近な身のまわりのことを考察しても、海軍を興さなければならぬことがわかるだろう、と小楠は言う。（『国是三論』・「強兵論」『海軍問答書』）

大変説得的な議論だが、なぜこのような結論を出すのに小楠ほど鋭敏な頭脳の人が百日もの日数を要したのだろうか。一つ考えられることは、彼はこの年（安政二年）の前年に「陸兵問答書」を書いて、攘夷を前提として陸軍による国防の論を立てたばかりだった。そこではさすがに従来の刀槍による本土血戦は考えていない。銃隊を本格的に採用し、それとともに陣法も変えて「土隊」を「銃隊」に変じ、銃と刀槍を併用して最後の血戦を考えていたのである。

自分が必死になつて考えた案だから、考えを組み直すのにある程度時間がかったのは止むを得ない。それにしても百日間は長過ぎる。まして海軍による防備案の骨子は、すでに佐久間象山によつて天保十三年



(一八四二)の十月、十一月「海防八策」「感応公に上りて天下当今の要務を陳ず」において展開されている。(そのような情報はある程度志士たちの間には伝えられていたのではなからうか。)ではどう考えるべきか。その理由として私は二つのことを考えている、(1)は軍事的問題を軍政的観点から捉えること(『国是三論』『海軍問答書』『海外の形勢を説き併せて国防を論ず』に展開)であり、(2)は内藤の言う「兵学」は経済的観点をも含んでいたのではないかとことである。広義の兵学ではごく普通のことと別に不思議なことではない。この節では(1)だけを挙げる。

小楠の軍政的問題への関心の拡がり、海軍の将校は身分制的考えを否定して実力主義による海軍の建設という社会改革へとつながる視野をもった海軍造成の提案とか、幕府の海軍でも各藩の海軍でもない「挙国一致の海軍」をつくらうという将来の全国統一の基礎ともなる海軍建設の理念とか、鋳山局や製鉄所、造船廠を造って自立した海軍にしようというように大きな社会的文脈の中で海軍の問題を捉えたことにしめされている。それだけでなく軍政的問題への関心は小楠の海軍論を、長い間平和がつづいた結果、「驕兵」(驕りたかぶって、その実はなまぐらな兵隊)となつてしまった武士たちを、海軍の将兵として軍艦へ乗り外国を巡観させて、聡明さ、胆気共にすぐれた「強兵」に変え、「恐怖の人情」を化して「万国を呑むの正気」をおこさせるといふ、海軍による国民性改造論とでもいふべき内容のものとした(『海軍問答書』)。これはまさに小楠の独壇場であり、彼は一大見識ある政治思想家の眼で海軍の問題を

捉えていたといふべきだろう。小楠は軍事の問題を論じながら、社会的に平等な条件の下に能力主義的で、しかも精神的エートスに満ちた将来の日本の姿を頭に描いていたように思える。

## (2) 経済的観点からの開国論

軍事的見地からの開国論は、論者が虚心にさえなれば、攘夷と開国のどちらを選ぶかといふことは比較的明快な問題である。しかし経済的観点からの開国論は、問題が錯綜して、前者に較べると判断を下すことは難しい。開国しても鎖国を守っても、いずれもなんらかの難点をもつ。したがって二つの立場の長所・短所を冷静に分析し、いずれの立場を選ぶべきかを判断し、自分のとるべき道を決断しなければならない。小楠が開国論に踏み切るのに百日もかかったのは、経済的観点からの開国論に自信をもった解答を出すことの困難さのためであろう。

しかもこの困難さには、私見によれば二つの段階がある。第一の段階は、国を開き世界の国々と通商関係をもつことが、日本国や日本国の国民たちにより多く利益になるといふことがはっきりわかることであり、それがわかればそれで決断がつく。第二の段階は、開国・通商が交易の当事者の双方にとって利益になる、という確信が明確にもてる段階をいう。ここに到つて小楠の開国論ははじめて完成する。あらゆる国々が相互の利益の大系に組みこまれた世界では、人々はもはや戦争することを考えなくなるだろう。しかしその確信をもつことは非常に困難で、彼が安政二年に開国の決心をした時は第一の段階にとどまっていた。そして『国是三論』の「富国論」も亦この段階の議論であつたと私は理解する。

そうはいうものの、この「経済的観点からの開国論」に到達することさえ非常に困難で、当時の志士たちでは小楠や橋本左内を除いて、佐久間象山はじめ、当時の開国論者の大部分は軍事的観点からの開国論にとどまっていた(象山の開国論が交易の観点をもつのは文久年間にはいつてからである)。

以下、小楠の開鎖の是非についての経済的観点からの考察を『国是三論』『富国論』によって見てみよう。彼はまず鎖国をよしとする者の立場に立って、開国をすることによどの様な害があるかを検討する。(1)わが国は五穀、金銀を始め万物豊饒で、他国に求めなくても人々がその生を遂げるのに何も欠けたものはない。しかるに今鎖国の鍵を開くならば、日本から輸出するものは「有用」の物で、輸入するものは「無用」の物である、「有用を以て無用に易う」——これが開国の害の第一である。(2)外国に輸出するところが多いと、わが国の品物が少くなつて必要に事欠く。これが害の第二である。(3)過度の輸出によつて品物が不足し、その物の価格が騰貴する。(害の三)(4)交易によつて利益を得る者は少数の商人で、交易の害は全国に及ぶ(害の四)(5)たとえ交易によつて物品は金銀に換わつたとしても、これまで金銀が不足していたわけではないので、これ以上の金銀は何の役にも立たず、有用の物が減つたことに替りはない(害の五)。ところで小楠が『国是三論』を書いてい

たようにどその時、すでに交易が始まり、そしてそのために物価が騰貴し、士・農・工・商の四民は共にその害を受けて生きてゆくことが困難な状態に陥ろうとしていた。これは交易を開いた結果、幕末日本を襲つ

た現実の害である。

以上が開国して交易を開いた場合の害であるが、鎖国の害はないのか、という問題を小楠は提起し、みずからその問いに答えてゆく。彼は言う、鎖国は二百年余りの「染習」となっているもので、その害は最も大であるが、誰もみな鎖国が害であることに気づいていない。鎖国が害になった次第を述べると次のようになる。二百年前は「乱世」につづく時代であったから、衣食住はじめ万事が「質素易簡」で、あらゆる事態を乱世と思ひくらくる習慣がついていたので、人の心も穏やかで不足もなかったが、太平の世が久しくつづくと思ひが矯奢になつてゆくのも「自然の勢」であつて、日本国中の大名たちの暮し方も次第々々に「倨傲鄭重」になつて、参勤交代をはじめ、その日その日の暮しの費用として金銀の出費は次第に多くなつたが、金銀の量は増えることなく、国中の人口は次第に増加するけれども、土地は昔のままであるから生産の増加は少ない。それなのに大名たちだけでなく下々の者も大名たちに見習つて富者は自分の分を忘れて驕りが好きになり、貧しい者もこれにならつて貧を忘れて驕ろうとするから、それぞれに「困窮逼迫」を招く。これに加うるに太平の世の恩沢に浴して生産に従事しない「遊手徒食」の連中(小楠は「今となつては武士も『遊手徒食』の仲間」と考えている)が十人中九人となつているので、生産されるものは依然として前のようである。被生産者だけが増加するから物価は自然と騰貴し、物価の値上に応じて金銀が不足する。金銀が不足すると四民は困窮する。四民のうちでも農・工・商の三民は自分の労力で生活するから、物価に順つ

て労働の対価も増加する。従って彼らの場合は、なんとかうつ手もあるが、ただ大名はじめ士と呼ばれる者は、収入に限りがあつて、支出が収入の限界を超えると、もう打つ手は何もない。

小楠は右のような鎖国封建制下の一藩の生活状況とそこでの人々の意識を次のように記述している。「鎖国封建の制諸大名各一国一郡を鎖閉して己に利あれば他に害あるを顧みず、利政聚斂いたらざる処なければおれ共国用の不足を補ひ難ければ、不得止諸士の俸禄を借り豪農富商を絞り細民の膏血を吸ふても今日の急を救はざる事を得ず。農・商も是が為に疲弊を受ける故愈々物価に就て其窮を免れんとするを以其弊又士に及び交互困窮するに至る。仍之上下共に榮辱礼節の差別も乱れて民心離叛に及び、一揆を起し窮を訟へ上に迫るに至るも亦少なからず、事重疊にして年を経て遂に騒乱を招かざる事を得ざるも必然の勢なり」(『国是三論』「富国論」三二頁)。徳川日本の「鎖国封建の制」が各一国一藩を「鎖閉」して統治する仕組であるために、人々のいや増しに増大する欲望と、それに見合う仕方で発展することのできない生産力との間の不均衡の問題を解決することができず、やむを得ず何度か「大節儉」(徳川吉宗、松平定信、水野忠邦らの試みた幕政改革、あるいは諸藩のさまざまな藩政改革をさす。小楠が天保十四年に書いた「時務策」もそのような試みの一つであつた)をおこなつてきたが、「驕惰の習慣」に安んじようとする「人情」に戻り人々は「節儉」をもつて「苛酷の新法」のよう

陰惡鄙野」におちいつて、もはや礼・義・廉・恥という「四維」をもつては治めることが難しい状況になつてしまふ。つまり失敗を重ねて心ある人は「鎖国封建の制」の行き詰まりを実感せざるを得なかつた。

小楠より一時代前の経世家海保青陵の経済思想は、人々の欲望や人情を考慮した近代的な経済合理主義思想であつたが、参勤交替制や鎖国という枠組を残して、その枠の中の経済合理主義の貫徹ということであつたために事態の究極の解決にはならない。小楠は鎖国の害については「方今航海自由を得て万国比隣の如く交易する中に就て、日本独り鎖国の法を固くする時は外寇の兵燹を免る、事を得ず、其時に當つて治世すら殆ど困極せる国勢を以て兵備を嚴にし或は離叛或は拂戾の士民を駆て防禦の策を建攘夷の功を奏せん事甚以無<sup>たて</sup>覚束<sup>だて</sup>」次第と云べし、是鎖国の害なり」(三二―三三頁)と力強く断定を下す。

こうして交易を開いた場合、鎖国をつづける場合のそれぞれの問題点は公平に列挙された。では日本はどのように決断すべきか。小楠はこの問題を根本的に解決するために「公共の道」を以て国を開き、積極的に交易する以外はない、として次のように述べる。

天地の氣運と万国の形勢は人為を以て私する事を得ざれば、日本一国の私を以て鎖閉する事は勿論、たとひ交易を開きても鎖国の見を以て開く故開閉共に形のごとき弊害ありて長久の安全を得がたし。されば天地の氣運に通じ万国の事情に随ひ、公共の道を以て天下を経綸せば万方無碍にして今日の憂る所は惣て憂るに足らざるに至

るべきなり(三二頁)。

このような「公共の道」を以て天下を経綸する基本的な考えに立脚しつつ、小楠は、日本国の、さらに具体的には福井藩のことを念頭に置いての経済政策を考えた。福井藩での経済政策は、小楠にとっては日本国を念頭に置いての経済政策であった、しかもそれは世界の中の日本の経済政策であった。<sup>(16)</sup> 福井藩はたまたま不思議な縁によって彼の抱負を実現すべく彼に与えられた場であった。彼はこの場で真剣に課題に取り組む。以下小楠の主導の下に福井藩がとった具体的政策論だけを紹介しておく。交易をするには、売却すべき品物をつくる費用が要る。ところが藩にはそれだけの金がない。そこで小楠は一万金の紙幣(藩札)をつくってこれを民に貸して養蠶の料に宛て、出来上った繭糸を官に納め、官はこれを開港場(長崎)にもって行って洋商に売り、一万一千金の正金を得る。たった数ヶ月のうちに藩札一万円は正金一万円となり、加うるに千金の利益を得る。官ではこの利を私せず公に示し、ことごとくこれを散じて民救恤の費用に宛て、その他金が出るだけですぐに返却されることのない費用(たとえば学校の建設などこれに該当するであろう)に宛てる。ただ繭糸だけでなく、民間の生産品をこの方法でつくり出し、年々正金の入るのを見てそれに必要な藩札を発行すると、民間の生産も増進し、政府も年を逐うて正金の備えが多くなる。<sup>(17)</sup>

この時、正金の融通が自由自在であれば、物価が高いのは怖る、に足りない。もし不換紙幣たる藩札が多くなりすぎると、銀局もしくは司農

局で、正金と引換えでこれを買上げる。なぜここで小楠が物価が高くなくても怖くないと言ったかという点、それは当時の日本の特殊な経済状況による。当時日本では金と銀との価格比率は一对五であったが、西洋では一对十五の比率であった。日本の銀は金に対して三倍割高であった。従って外商が百枚の洋銀(一〇〇ドル)をもってきたら三百枚の一分銀と交換してもらえる。これを日本の一両小判に交換すると、一分銀は四分の一両だから、七十五枚の小判がもらえる。この小判を外国へもつていくと約三百ドルの洋銀が貰える仕組になって、外国人の日本渡航者は約三倍もの利益を得るという仕組になっていた。<sup>(18)</sup> 小楠が物価は高くなつた方がいい、と言っているのは、そのことによって外国の利益の幅が減るという意である。ここに見られるように、こと経済の問題に対する小楠の議論は非常に緻密であり、けつして大まかで無責任な政論家の議論ではない。交易が国民の不利益にならないよう考察が進められていて、彼が国際化の時代にふさわしい経世家であったことがよく分る。事実この考え方は三岡八郎(後の由利公正)らによって福井藩で現実化され、非常な利益を上げた。

## 五 西洋列強は有道の国か

これまで小楠の「攘夷論」から「開国論」への転向と『海国図志』との関係を「軍事」的開国論と「経済」的開国論の両側面から検討してきた。しかし残されたもう一つの問題は「有道」「無道」という視座に立つて、通常の攘夷論を超える立場に立ち得た小楠が、それにもかかわ

らずまだ開国に踏み切れなかった理由として、西洋諸国は「無道」の国であるという認識から抜け出ることができなかったからである。したがってわれわれは小楠が『海国図志』から西洋の代表的国々、その中でも日本にとつて関係の深い国々、小楠の場合は、米・英・魯の三国について、どのようなイメージをもったか、ということを検討する作業が残されている。従って「垂米利加篇」「英吉利篇」「魯西垂篇」、とくにアメリカ篇が重要な意味をもつ。そしてそれぞれの国について、またそれぞれの国の記述を通じて西洋にどのようなイメージをもったか、そのことが小楠の攘夷論から開国論への転回にどのような寄与をしたのか、ということを明らかにするのが本節の課題である。

小楠はオランダ語や英語は読めない。彼の西洋についての知識は『海国図志』を読むまでは耳学問にすぎなかった。したがって情報の提供者が間違っていたら、とんでもない間違いを犯す。たとえば嘉永六年八月七日、伊藤莊左衛門宛の手紙には次のようなことがしるされている。

「全体ヲロシヤは御案内通り世界第一之大国、イギリス杯は元来其属国に候処文政之初(マ)かより強大に相成独立いたし、ヲロシヤの命令を受不申全体悪しく有之。此節の北アメリカも同様にて……」(二〇三頁)云々。

このような初歩的な誤謬を犯している手紙に接すると『海国図志』を読んだことが小楠にとつてどんなに大きな知的展開を可能にしたかということがよくわかる。ところで小楠が『海国図志』を読んだ成果が一番初めに記録として残っているのは、安政三年(一八五六)十二月二十日の福井藩主村田巳三郎(氏壽)宛の書簡、ならびに年月は不明ではば同じ内

容の豊後岡藩の小河弥右衛門(一敏)宛の書簡である。その内容は意外にもロシアについて記されたものである。

ここにしるされていることの要点は、ロシアが「政教一致」の国であること、「比達王」(ピョートル大帝)による中興から現在までほぼ二百年間政令が行届いているとされている。その行届いていることの内容として書かれているのは、(1)国王は一年の三分の二は国内を巡視して「民間之利害、政事之得失」を察し、しかも「供人」わずか八十人、別に行在所というものもなく行懸りに官舎あるいは民屋に止まるというように極めて手軽なこと、(2)「学校之法」は一村の「童男女」から教育を始め、優秀な子どもは「一郷之学」校に挙げ、それからその一部は「ペートルヒュルクの都城之大学校」(ペテルスブルク国立大学)に入る。この大学は学生数が一万人余り、そして政事上重大な問題があったら、その案件はすべて学校に下し、そこでの「衆論一決之上」でなければ、国王や政官たちの考えだけで実施に移すことはできない、そしてまた執政大臣等の要路の役人もまた「一国之公論」でその登庸・免職、昇進・降職(黜陟)のことが決まる——これらはすべて「宗旨之戒律の第一義」である、とされている。そして経済については人民から取立てる年貢は「十之一分」(十分の一税)で、これ以上はいささかも取らない。そして経済の道は、土地から掘出す金・銀・銅・鉄等の産物は「工作場」に集め、その地その地で製品をつくり、これで天下に交易し、その利を国用とする。これを要するにその政事はまったく「教法」にもとづいているから人心は一致し、国のうちに異論はない、そしてこれらのこと

は、西洋諸国では大同小異であるとされている。

これを見ると、ロシアの政治はまるで堯舜の政治や、「学校問答書」その他で小楠が展開した君臣の「講学」による公論の世界のようだ。<sup>(19)</sup>「政教一致」のことはそれでもよろしいが、ピョートル大帝のことであれば、佐久間象山だったら、若いときオランダに潜行して造船技術を学び、技術者をロシアに連れて帰ったところなどを強調することであろう。教育のところでも、国王が許した者以外は、貴族や大臣と雖もこれを嗜むことを許さず、国王の權威を守るために「学を禁じ」たというような『海国図志』中の記事はまったく取り上げられておらず、また国家の政治の方針を決める際に大学に案件を検討させ、「公論」が形成されたのち、大臣によって実施される等の記事も、原文の「国汗握權<sup>(20)</sup>」毎「公会議」<sup>(21)</sup>事召「国之尊貴者百二十人」諮「問得失」令「各抒意見」<sup>(22)</sup>ということであって、公会の構成員の意見を問うことではあっても、大学とは別に関係はない。何分原本は小楠も認めているように粗笨な書き方だし、その上小楠自身も、さらに拡大して言えば当時の日本人のロシアについての知識自体が、ほとんど空白に近かったから、小楠は不十分な記事の中から断章取義的に自分の好ましいと思う記事を取上げ、足りない分は自分の想像力でふくらませて、自分の考えている理想の政治世界のイメージをロシアの中につくり上げたというべきであろう。小楠がロシア篇の叙述の粗笨さを批判しつつも、案外ロシアのことについて詳しく述べているのは、その教育のシステム、とくに最高の教育機関であるペテルスブルクの大学における「講学」——「講習・討論」が「公論」

となつて、ロシアの国策を決定していると小楠が想像を逞しくすることを可能にする手がかりがいくらかあつて、彼の「学政一致」の考えと共通するものを感じて、つい肩に力がいりすぎたものではなからうか。さて次に小楠の書いたものの中から、彼が『海国図志』の各国篇から何をどのように学びとつたかということを見てみよう。一番確かなのは『国是三論』中の「富国論」の記事である。ここには米国・露国に関して小楠が学びとつたものが要約的に記してある。

：墨利堅に於ては華盛頓<sup>ワシントン</sup>以来三大規模を立て、一は天地間の惨毒殺戮に超たるはなき故天意に則て宇内の戦争を息<sup>やむ</sup>るを以て務とし、一は智識を世界万国に取て治教を裨益するを以て務とし、一は全国の大統領の権柄賢に譲て子に伝へず、君臣の義を廢して一向公共和平を以て務とし政法治術其他百般の技芸器械等に至るまで凡地球上善美と称する者は悉く取りて吾有となし大に好生の仁風を揚げ、英吉利に有つては政体一に民情に本づき、官の行ふ処は大小となく必悉民に譲り、其便とする処に隨て其の好まざる処を強ひず。出戎出好も亦然り。仍之魯と戦ひ清と戦ふ兵革数年死傷無數計費幾万は皆是を民に取れども、一人の怨嗟あることなし。其他俄羅斯<sup>オロシヤ</sup>を始各国多くは文武の学校は勿論病院・幼院・哑聾院等を設け、政教悉く倫理によつて生民の爲にするに急ならざるはなし、殆三代の治教に符合するに至る(二九—四〇頁)。

ここでは小楠の捉え方は、彼の個性を生かしつつ、しかもさきに見た口

シアについての叙述と違って、大変客観的になっている。欧米の政治は小楠の考えるような政教一致ではないが、キリスト教が文化の基礎にあるから倫理にもとづく政教、——小楠の文脈で言えば人民のためにはかかる政教——これはアメリカ、英国においてはまったくその通りだし、専制的な帝政ロシアと雖も公共の福祉政策に限っては恐らくその通りだと思ふ。彼らの国々の国際政治についての考え方や行動には問題があるが、国内政治への志向ではそのような方向を米英両国はすでに取っており、ロシアも専制政治の枠の中で部分的にそのような政策をとっていたかもしれない。そういう面だけを見ると、彼らは「有道の国」であり、わが国は「私営の国」となる。かくして小楠は「如<sup>かくのごとく</sup>此諸国来て日本の鎖鑰を開くに公共の道を以てする時は日本猶鎖国の旧見を執り私営の政を務めて交易の理を知り得ずんば愚といはずして何ぞや」（遺稿篇四〇頁）と断定を下す。すでに言われているように、「夷虜応接大意」の有道・無道の立場が逆になって、西欧側が「有道」、日本側が「無道」になったとも一応言える。しかしここでの小楠の視点は、各国の国内の政治のあり方によって変わっていることを見落すべきではない。

ここでは小楠は「夷虜応接大意」の列強国際政治における行動のしかたから立てられた「有道・無道論」とは視点を變えて、一個の国家として「政教悉く倫理によつて生民の爲にする」政治であるか否か、ということをめぐつて、判断するという態度をとっている。そして『海国図志』に載っている叙述から、米・英・露のいずれも「三代の治教に符合するに足る」国々であるという判定を下され、「如<sup>かく</sup>此諸国来て日本の鎖

鑰を開くに公共の道を以てする時は日本猶鎖国の旧見を執り私営の政を務めて交易の理を知り得ずんば愚といはずして何ぞや」（富国論）と、国内政治におけるその国のあり方が「有道」であれば交易、通商を認めることになり、これによって彼を鎖国論にとどめた対外的契機は三つとも消失したということになった。国内政治においては、彼がかつて心酔していた水戸藩に対して小楠は、開鎖問題についての曖昧な態度を「心術の不正」に根ざすものとして批判し、もはや彼を攘夷に引きとどめる諸契機は悉く消え失せてしまった。小楠の思想が大きく飛躍し、当時の思想家の中で群を抜いた普遍性をもった思想を展開するのはこれ以後である。

小楠が『海国図志』から学んだことで、まだ論じ足りないことは、彼が「アメリカ篇」から学んだことである。当時の小楠にとってアメリカは世界中で国内政治についても国際政治についても、模範とすべき唯一の国であり、真正正銘の「有道」の国であった。

小楠が安政二年以降、『国是三論』の執筆前に書いたと思われる「海外の形勢を説き併せて国防を論ず」という小論の中で、彼はアメリカについて次のようにしるしている。

亜は尤晩進の国なれ共其国土人心盛大にして賢を薦め善に従ひ、万国盛衰の迹に明にして短を舍長を取制度を立ること勝れたるべし。其国是とする所万国の戦争を息め交易の道を以て諸国の情を通じ、善に従ふの道は之を世界に取る。是等宏大の規模に至ては決して他

邦の及ばざる所なり。且又人の国を覬覦し人の土地を掠奪するの類此国には絶て無<sup>レ</sup>之ことは大に利害に明かなる所なり。幸に來て交和を求む、我又是等の国と深く交り我國の羽翼とせんは策を得たりと謂つべし」(六三頁)。

ここに見られるように、アメリカは最も晩進の国であるが、国土・人心共に大きく大らかで、賢者がそれにふさわしい位を占め、善に従う道徳にもとづく政治がなされているところで、その国はとするとところはスケールが大きく世界中の国も及ばないものがあり、また人の国を侵略することは絶えてない、従つてアメリカとは信頼を以て交わるべきことを小楠は提唱している。彼が『海国図志』を読み、アメリカ合衆国という国を知ったことが、彼の「開国論」への転回の最も深い理由なのではなからうか。彼がこの地上において儒教の古典、とくに『書経』の「二典、三謨」を読んで、彼が自分の中に思い描いていた「理想の国」をこの地上に見出した。これこそ「朋」とすべき国、深く交わるべき国なのではなからうか。私にはこのような思いが彼の開国論の最も深部にあったように思える。そしてそれが彼の次の「和魂批判」となるのである。

無識無策世の所謂和魂なるもの却て彼を無道禽獸なりとし、尤甚しきは之を仇讎とし之を拒む。天地の量日月の明を以て之を觀ば何んとか言はん ア、隘陋国家蒼生を誤る 痛歎の至ならずや(同上)

しかしこの「和魂」はありし日の自分にもあった。「無道の国」として、自分は朋とすべき国を遇しようとしていた。この反省の氣持も右のこと

ばに籠められているように思える。右の文章は彼の魂の深部にある「攘夷」の心がすっかり洗い落された記録としても読めると思う。

小楠が具体的にアメリカ合衆国をどのような国として捉え、それと共に日本の国をどのようなものとして見直しするのか、そしてその過程で問題解決のためにどのような思想を形成したか、これを明かにするにはもう少し紙数が必要だろうと思う。このことは次稿の課題としよう。

## 結び

私はこれまで小楠の攘夷論から開国論への転回を、軍事的観点、経済的観点、そして開国を求める西洋諸国は果して有道の国か無道の国か、という三点から明らかにした。主な点はほぼ論じつくしたように思うが、唯一、経済的観点の点で論じつくしていないところがある。それは、開国することは利害関係からいうと一長一短あって、必ずしも絶対的にプラスであるという断定は下さないが、大所高所から見れば開国する方が天の理にかなう、また開国した場合の経済上のマイナスの面はいろいろの工夫でプラスに転化することは可能であるから、この際断固として開国すべきである、という小楠の見解は充分に判った。しかし開国がわが国にとって利であつてわが国の人民を豊かにするものであつても、交易の相手国にとつてもそれが利であり、そしてその相互の利益が世界の繁栄と平和を現実化するという保証はこれまでの叙述の範囲ではなかったのである。経済上の関係が相互に利益を与え、相互の共存、繁栄を保証するものであるならば、開国をし、交易関係をもつことは地



地球上の諸国の平和と共存を保証し、征服、被征服の関係を地球上から駆逐し、戦争することの無効性を人類に自覚させるであろう。でなければ「四海兄弟」の理想は一場の夢にすぎない

ところで小楠が「四海兄弟」の説を述べているのは、元治元年（一八六四）の「沼山対話」が初めてである。

ここで小楠は、日本の今日の人情は「開国」と「鎖国」と「因循」の三通りに分れるとし、今日の因循なりにうち過ぎるならば、日本の衰亡を招くであろうとして、「開国」のあり方について分析する（「鎖国」と「因循」の相違が明確でないが、「鎖国」は積極的、自覚的鎖国論を意味し、「因循」はこれまでの惰性で鎖国をよしとするものである。そして「今日の因循なりに」はここで言う「鎖国」も「因循」も共に含まれると理解すべきであろう）。

さらに彼は俊秀井上毅の、開国にも三通りあるとして、その三通りを（１）国本を正大にして神聖の道を宇内に推し広めようとするもの（２）自ら強ふして宇内に横行するに至らんとには水軍を始め航海を開くべしとするもの

（３）彼が四海兄弟の説に同じて、胸臆を開て彼と一鉢の交易の利を通ずべし

とするものとする見解に対して、小楠は第一の説に対しては、「神聖の道とも被<sup>すわわが</sup>申まじく、道は天地自然の道にて乃我胸臆中に具え候処の仁の一字にて候」とコメントして、人々が仁の一字に気をつけるならば、それが自然の道であるとして、神聖の道を独我論的に主張する神

道の批判をなす。

そして第二の説に対しては、小楠は「横行」と申すことができずに「公共の天理」ではないとして、宇内に乗出すには「公共の天理」で地球上の諸国の紛乱をも解くというほどの気宇の雄大さが必要であるという。批判の原理として「公共の天理」という普遍理想が提示されていることは注目すべきであろう。第一は、神道や後期水戸学的タイプの思想、第二は、佐久間象山らのようなタイプの思想をさすものと考えてよいと思う。両者は幕末当時は別の系統の思想であったが、三国干渉後明治三十年代から混合して帝国主義的膨張主義となる。

第三については小楠はここでは何もコメントしていないが、この「沼山対話」の前の箇所「洋人の万国一体四海兄弟と申唱へ候は天理に叶候哉」という井上毅の質問に対して、これは全体に就て言ったので、具体的現実には親疏の差別があるとした上で、「然るに華夷彼此の差別なく皆同じ人類にて候えば互に交通いたし交易の大利を通し候が今日自然の理勢と被存候」としているところに小楠の真意がよく示されている。

現実に国際関係の上で歴史に由来する国民感情にもとづく親疏の關係、さらには国家のもつ「割拠見」というエゴイズムがあることを小楠は認める。しかしそれにも拘らず「皆同じ人類」であるというこに立つて、互いに交易し交通の大利を得るのが、今日の「自然の理勢」である和小楠は言っている。これは今日の自然の道理であるとともに、社会的にも承認され、社会に支えられて時代の勢いに乗った思想であるというのであろう。

小楠は、西洋諸国が国内において民主的に公共の原理で動く方向に向っていないが、国際的には「四海兄弟」という理念を掲げつつも、実際はそれぞれの国家の利益を求めて争っているという国際関係の現実をよく知っていた。だが諸国家の取るべき方向は「公共の天理」「天地公共の実理」という普遍思想に立脚して、「四海兄弟」の方向に行くことだと考えていた。しかしこの普遍思想だけで四海兄弟の説が現実化する保証が得られるのであろうか。私にはそういう疑問が残る。

私の疑問というのは、第一はもしこの「沼山対話」の説が自己完結的な思想なら、明治二十年のコブデン、ブライトらのマンチェスター学派に立脚した『新日本の青年』時代の徳富蘇峰<sup>(21)</sup>の思想の原型であり、三国干渉のようなことに会えばそれまでの平和主義を捨てて突如として「帝国主义」的膨張主義に変じてしまうような思想のひ弱さがある。この問題をどう理解すべきか。

第二の疑問は、交易が一方を勝利者とし、他方を敗北者とする危険性をもつことはいまでもない。小楠はそのことに十分気づいている。もしそうならば、自由交易の現実がそのような危険性を含むとはいえ、最終的には自由交易が相互に利益を与え、相互の共存を可能にするという信念を小楠は何から得たのだろうか。

第一の点については、私は「沼山対話」の開国論については、自己完結的な議論として読まないことが重要であると考える。『国是三論』において「富国」と「強兵」とは一对のものとして論ぜられているし、「陸兵問答書」「海軍問答書」等の著作に見られるように、国防論は常に

彼の経世的関心の重要な一項であった。とくに「海軍問答書」は「沼山対話」と同じく元治元年に書かれているし、「四海兄弟説」を信奉しても、国防的関心の一項が、世界政治の現実をよく知っている小楠の経世論から落ちてしまうことはあり得ない。そしてそのことによって「ideal-real」な経世家、すなわち基本的には理想主義的であって現実的問題にも配慮した経世家として小楠は終始した。彼には宗教的側面もあるが、彼は宗教家ではなくてあくまで理想への基盤に立って、ideal-realの両側面をもつ経世家であった。そのことを見落すと、それまでの平和主義者から突如として帝国主義者になった三国干渉後の徳富蘇峰のように判断の均衡を失ってしまうことになる。小楠は鋭敏な頭脳の持主であったが、平衡感覚sense of equilibriumの持主であった。

第二の問題については、横井小楠ならこの箇所から交易が相互にとつて利益になるという見解を引き出したかもしれないと思わせるところがある。それは『海国図志』『墨利加洲部』の「弥利堅国総記上」の「美理哥国史畧」において、米国の経済的發展についてしている部分であり、以下はその要約である。

ここにおいて、建国の初め、米国においては「知」もなく「識」もなく「工作之事」（工業生産の技術をマスターした人もいなかった。しかし、この米国という新しい国は、もろもろの困難を見事に乗り越えた。原材料があつて知識がない場合は、他国の知識ある者を受け入れて制作の知識を教わり習う。知識は有るが原材料がない場合は、他の国に行つてそれを運載して帰る。知識も原材料も有りながら人力がない場合には水力、火力とか獣力等の物力を以て人力に代える。こうした工夫をして米国は短期間のうちに見事豊かな

国となった。

その具体例としてこの本が挙げるのは米国南部の棉花のことである。新しい国がつくられた時、南部における棉花はごく僅かしかなかった。しかも一つの紡車、一台の織機で一人の人が紡ぎ、かつ織るということであったから、その生産は容易ではなく能率も上がらなかった。だから棉の価格は高かった。二十数年間に渉る嘉慶年間（一七九六—一八二〇）に米国人の知識は進み、工場毎に紡車数十架を置いて、人力を加えず水力だけでこれを運転し、数十車の棉花を紡ぐようになる。一人の女児が監督するだけである。また布を織る工場毎に織機数十張を置き、これも水力で運転し、数十機の布を自動的に織る。ただ一人の少女がこの工程を監督するだけである。ここに一つの紡織所があり、ここに紡花車一万五千架があると、毎日四千丈の布を織ることができるようになった。加うるに経営の合理化も行われ、道光六年（一八三六）から今に至るまで毎年生産高は二十億七千万斤に達している。估価は二千七百万圓である。品物の五分の一を国内に留めて他はみな他国で販売する。道光六年から現在に至るまで棉花の生産は日に増加する。これを二十年前の価格に較べるとすでに三分の二を減じている。しかし現在の商をなす者の利益は二十年前に較べるとはるかに多い。だから布を織り出すことが日増しに多くなり、その反面苧羅布（麻布の一種）の需要は日に減じていった。

この記述を見ると建国の頃は合衆国の南部でもまだ微々たる産業にすぎなかった棉布が、知識の増大と技術の向上、管理の巧妙さ・経営の合理性とが相俟って廉価な製品が大量につくられるようになり、最近二十年間の歴史を見ても売価は三分の二も安くなっているのに、会社の利益ははるかに増大している。しかもこの製品の五分の四は外国で売られているのであるから、米国の企業の利益——しかもそれは米国全体の利益となる——は、同時に外国の購買者の利益になり、彼らの生活費の切り下げとなっている。交易は生産国と輸入国のいずれにも利益を与えることになる。小楠は右の記述を見て、交易がその相互に利益を与える現実的可能性を確信したのではなからうか。

## 注

- (1) 幕末の歴史の舞台への登場については、拙稿「幕末志士の悲願」（講座『思想の歴史』第十一巻「胎動するアジア」、平凡社、その後拙著『実学思想の系譜』に所収）を参照されたい。
- (2) 小楠のこのような儒教的国際自然法思想の先蹤として藤原惺窩（一五六一—一六一五）がいることを見落してはならない。これについては拙稿「江戸儒学の国際的普遍性」（『地球日本史』②、所収、を参照されたい。  
なお幕末から近代日本にかけての「国家理性」の成立の問題については、丸山真男の「近代日本思想史における国家理性の問題」（一九四九年一月の雑誌『展望』に初出（未完）、のち一九九二年に手を加えて完成、現在『忠誠と反逆』、筑摩書房に所収）は必見の論文であったが、ここでは丁健良（一八二七—一九一六）の漢訳『万国公法』（一八六四）（原著ホイートン Henry Wheaton（一七八五—一八四八）の Elements of International Law（1836）に「天地の公道」「万国普通の法」「宇宙の大道」という語があることが紹介されているが、小楠はこの書を読む（慶応元年）以前に「天地公共の実理」ということばを使用していることは銘記されるべきである。同様のことが、グロティウスの『戦争と平和の法』が書かれる以前に「理」の觀念が国家平等の思想として藤原惺窩によって提起された時に起っている。日本の朱子学にはこのように「国際的自然法」として発展する可能性があったことを閑却してはならない。
- (3) 小堀桂一郎『鎖国の思想——ケンペルの世界史的使命』（中央新書、336）による。この本は小著ながら、きわめて内容のある信頼できる著作であって、この論文の「鎖国論」の部分はこれに負うところが多い。
- (4) 原題は次の如くである。"Regnum Japoniae optima ratione, ab egressu civium & exierum gentium ingressu & commione clausum".
- (5) その原文は注(4)のラテン語訳。
- (6) 志筑忠雄の天文物理の学に関する代表的著訳書。上篇は寛政十年（一七九八）、中篇は同十二年、下篇は享和二年（一八〇二）の三篇から成る。もとはニュートン力学の系譜を引く英国のジョン・ケイル（John Keil）のラテン

語の著書の蘭訳に基き、忠雄が翻譯し、さらに自己の思索による見解をも加えた画期的著作である。

- (7) この問題については、吉田忠「志筑忠雄と氣の理論」(日本思想体系(65)『洋学 下』岩波書店を参照)。

- (8) わが国に現存する志筑忠雄訳・ケンペル『鎖国論』について詳しく調査したものに、鈴木圭介「私の『鎖国論』入門」(『学燈』一九八一年五月・十二月)、「学びの運命、ケンペル『鎖国論』の書誌学」(『歴史と社会』六号、一九八五年六月、リプロボート発行)ならびに井田清子「ケンペル『鎖国論』写本を読み継いだ人々」(『思想』八〇〇号、一九九一年二月号)がある。井田氏によれば、現存するものの、氏が手に取って見た、コピーで見たものに限ると五五部、見ることが難しいものを加えると、五八、九部に達するという。現存するものの数から、当時読まれた写本の数はかなりのものであったことが推察される。小楠の読んだものも、その行方は定かではない。

- (9) 以下の記述は山崎正董編『横井小楠 遺稿篇』の「遊学雑誌」中、八〇四頁より八〇八頁までを参照。

- (10) 原文は、山崎正董『横井小楠 遺稿篇』六九二―三頁。

- (11) ケンペル著、今井正訳『日本誌』下巻、四四八頁。

- (12) ここに引用されているケンペルのことは、同上、四四六―八頁に拠る。

- (13) 内藤泰吉については、花立三郎「内藤泰吉——熊本実学派の研究」、『近代熊本』No.2所収、一九九九年二月を参照されたい。

- (14) 内藤泰吉の長男游が、父泰吉から聞書をとってまとめた泰吉の一小自叙伝、昭和二年発行、内藤游が著作兼発行者で、民友社で印刷されている。

- (15) 李光麟『『海国図志』』の韓国伝来とその影響」(韓国文、現在『改訂版 韓国開化史研究』ソウル)に収録。

- (16) 小楠は経世問題については「本国を該談するの器量ありて始て一国を治世べく、日本国を統撰する器量有て始て一国を治世べく、一国を管轄する器量有て一職を治むべきは理の当然なり」(『国是三論』「富国篇」三三頁)と考えていた。

- (17) この落札を発行し、それによって民間の生産を高めるという発想は、小楠が嘉永四年(一八五二)関西を巡歴した折、筑前秋月藩で藩の「櫛方」という一局が「札」を発行し、相当の値段で櫛を買上げ、それを蠟にして大阪で金銀に換えており、その成功の秘密は「官府値段立宣敷」(公正な値段で買上げ、藩政府の利益をはからない)という点にある、という観察に立脚している(『遊歴聞見書』、八二六頁)。小楠の思考の強さは、書籍からの知識だけでなく、自分の見聞したことを基にして、その経験を一般化・理論化していくところにある。

- (18) この説明は、花立三郎『国是三論』(講談社学術文庫)四九頁に拠る。花立の論はもと小西四郎『開国と攘夷』中央公論社『日本の歴史』19の説を採用したものである。

- (19) 拙稿「横井小楠における学問・教育・政治——『講学』と公議・公論思想の形成の問題をめぐって」『季刊日本思想史』No. 37, 1991を参照されたい。

- (20) 成文出版社六十巻本『海国図志』(第五卷六一―左、総ページ一九八八頁)ここに引用した文章は、鹽谷・箕作の校閲をへた和刻版では「国汗操」権毎「公会議」事西国之尊貴者百二十人諮問特失令各抒意見」と、原文の「召」が「西」となっている。もし鹽谷の校閲が正しいのであれば、エカテリーナ二世当時のロシアの政治が連想され、それはそれとして面白いのだが、『海国図志』の定本である百巻本でも六十巻本と同じく「召」になっているから和利本の誤りである。

- (21) 拙稿「若き日の蘇峰とその転回」(1)(2)(3)(4)、『創文』一月―五月号、のちにこれを改稿して「徳富蘇峰と有賀長雄におけるスペンサーの社会思想の受容」(上)、『東北大学日本文化研究所研究報告』14、昭和五三(一九七八)年、を参照されたい。

- (付記) 本稿は三菱財団の援助を受けて研究中の「近世日本哲学史研究——東洋思想の可能性の追求を含めて——」の一部である。但し本稿はまだ哲学的問題にはいりこまないで終わっていることをお断りしておく。